敦煌禅宗資料分類目録初稿

Ⅱ　禅法・修道論

〔Ⅰ〕

田　中　良　昭

1.　恵達和上頓教大乗秘密心契禅門法

①　致86

〔**移録**〕　①鈴木貞太郎（大拙）『燉煌出土少室逸書』影印pp. 75—76 1935.

①鈴木貞太郎（大拙）『少室逸書及解説』p. 90　1936.

〔**論文**〕

鈴木貞太郎（大拙）　恵達和上頓悟大乗秘密心契禅門法〔『少室逸書及解説』p. 71〕　1936.

関口真大　敦煌出土の達摩大師撰述〔『達摩大師の研究』pp. 42—43〕1957.

柳田聖山　禅宗の本質(歴史的考察)——その1——〔『初期禅宗史書の研究』p. 470〕1967.

〔**略記**〕　既に古く約35年前に，鈴木大拙氏によって，北京の北平図書館蔵の一本が発見され，簡単な解説と共に公にされたが，その後，異本の存在も知られず，この文献について関説するものもあまり多くはない。本文は11行の偈文を書したものであるが，鈴木氏は，その標題の「頓悟」（実際は「頓教」）「大乗」「秘密」「心契」「禅門」等の文字に注目され，この文献を「慧能によりて唱え出された頓教の法門が，唐の初期において如何なる波紋を宗教思想界に描き出したかの一消息

を伝えているもの」とされていた。その後，長い間この文献については何ら触れられなかったが，近年，関口真大氏が本書について，本文中の「心来無所処，尽意看更看，看看看不絶，是名無漏智」にみられるように，看心を強調するのが本書の特色であり，禅宗思想発達の一面を示すもの，とされたのである。

また，柳田聖山氏は，禅宗諸文献に用いられる「最上乗」の呼称に関連して，この呼称が新来の密教に対する意味を有していたことに注意を喚起され，本書の性格を神秀の弟子敬賢（660—723）と善無畏三蔵（637—735）の交渉や，普寂（651—739）と一行（683—727）との師資関係等，いわゆる禅と密教との交渉の間に出現したとされる『最上乗受菩提心戒』や『心地秘訣』と同傾向のものではないか，として位置づけされた。

しかし恵達和上については，各氏とも明確な言及をなされず，関口氏は，「未だ恵達和上なる者の伝を詳らかにすることができない」と述べておられる。従って恵達和上の為人が明白にならない限り，本書の決定的な位置づけをすることは困難であるが，ただ恵達という名は，神会の『菩提達摩南宗定是非論』（以下『定是非論』）に二度ばかり出現している。もっともこの恵達は，胡適氏の『神会和尚遺集』上海1930. では，恵遠とされていたもので，民国47年（1958）に同氏が新たに校定された論文「新校定的敦煌写本神会和尚遺著両種」〔『中央研究院歴史語言研究所集刊』29. p. 848〕台北1958. で恵達と訂正されたものである。この恵達が今問題の恵達和上と同一人物かどうかは，もとより明らかではないが，『定是非論』には，この恵達について次のように記している。

すなわち，普寂と同学，従って神秀下の西京清禅寺僧広済が，景竜3年（709）11月に，韶州に到着し，10数日たったある夜半，慧能の房内に入って五祖弘忍より授けられた伝信の袈裟を偸もうとした。そこ

で慧能が一喝すると，その喝声を聞いた恵達師と玄悟師が起き上り，房外に出，遂に広済師は玄悟師に手を把まれ，声も出せないようにされた。玄悟師と恵達師が慧能の房に入ると，慧能は「誰かが房内に入り，手をのばして袈裟を取ろうとした」といい，そこで南北の道俗が房内へきて，慧能に「入ってきたのは南人か北人か」と問うと，慧能は「知らない」と答え，「僧か俗か」の問にも，「知らない」と答えた。しかし慧能は十分承知していて，南北の両人が損傷し合うことを恐れてこのような答えをしたのだ，としているのである。

もとより伝衣の袈裟が慧能の処にあり，それを普寂の同学の者が盗みに来た，という設定で北宗攻撃をした神会独特の手法によるものであるが，この恵達が実在の人物だとすると，普寂（651—739）や神会（668—760）と同時代ということになり，今問題の恵達和上と関係があるとすれば，この書もその頃のものということになる。しかし『定是非論』による限り，神会は，恵達師，玄悟師を恵能下の人としているのであり，看心看浄を障道の因縁として退けた慧能の門下に，看心を強調する立場の人が出現することも大いに問題のあるところである。従って，恵達和上をこの『定是非論』に出現する恵達師と直ちに結びつけることは差し控えなければならないと考えられる。

2.　臥輪禅師看心法

①S 1494　②旧禿氏祐祥氏所蔵本

〔**移録**〕　①②鈴木大拙「敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて，第2原本」〔『禅思想史研究』第2，pp. 479—480〕1951.

〔**論文**〕

鈴木大拙　「敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて，第1解説」〔『禅思想史研究』第2，pp. 466—468〕 1951.

関口真大　「達摩和尚絶観論」（燉煌出土）と牛頭禅〔『達摩大師の研究』

pp. 107—109〕1957.

柳田聖山　思想という語をめぐって〔『印度学仏教学研究』8—1〕 1960.

長谷部好一　禅法の交流について〔『宗学研究』3〕 1961.

柳田聖山　『楞伽師資記』の形成——その1——〔『初期禅宗史書の研究』pp. 67—68〕 1967.

〔**略記**〕 ①は頭初に「臥輪禅師看心法」と題する不完全な断簡，②は鈴木大拙氏が竜谷大学教授禿氏祐祥氏から手に入れられた貝葉形の敦煌写本の写真中にあったものである。特に②は，珍しい貝葉形のもので，写真6葉，その中に『師資七祖方便五門』と『臥輪禅師看心法』とがあり，前者は完全であるが，後者は末尾を欠いているという。鈴木氏はこの両者を対校して，その著『禅思想史研究』第2に全文を示されたが，そこで註記されているように，両本が一致するのは，僅かに最初の「随心動念」から，鈴木氏校訂本の3行目「徒費其功。而」に至る3行のみで，それに次ぐ「無住法行者」から10行目の「謂動観者如得定也」までは①にはなくて②だけにある部分であり，一方①の方は，「而」以下改行で，鈴木氏校訂本の11行目にあたる「若人求道不習此」より，13行目の「無物不動性常安」までで切れ，再び改行で，14行目の「但勤向心照必当。自性悟解時不異迷。迷時不移処，若人通達此，不求弥勒度」があって了っている。

従って，これだけでは①の連続の状態，②と①との関係が不明であって，この両者と比較しうる新たな異本の出現が待たれるわけである。『敦煌遺書総目索引』では，S6103 を「臥輪禅師看心法（？）」としており，柳田聖山氏の『初期禅宗史書の研究』に付された「敦煌・禅宗関係資料一覧」では，このS6103に加えて，S6331をも『臥輪禅師看心法』とされている。私も之にもとずき，先行の「敦煌禅宗資料項目別一覧」〔『曹洞宗研究員研究生研究紀要』1　pp. 92—101〕では，『臥輪禅師看心法』として前掲①②の他に，S6103，S6331の両本を加え，

都合４本を列記したのであるが，実際はＳ6103は『臥輪禅師看心法』ではなく，『失題十二時曲』と『荷沢和尚五更転』の残巻であり，またＳ6331は，『敦煌遺書総目索引』に，「伍子胥変文」とある如く，これも『臥輪禅師看心法』ではない。従って『臥輪禅師看心法』は，前記２本のみということになるのである。

この『臥輪禅師看心法』が，後の各種禅宗文献に広く引用，依用されていることは，注目すべきことである。すなわち柳田氏によれば，浄覚の『楞伽師資記』における第１祖求那跋陀羅伝は，先行資料の雑然たる寄せ集めにすぎないが，その素材の一つを提供したものにこの『臥輪禅師看心法』があるといい，また関口真大氏によれば，入唐蕃僧法成が，801 年に書写したというＰ2885の牛頭法融作『達摩和尚絶観論』巻末の19問答中，第14問答が，この『臥輪禅師看心法』の一節であるという。更に鈴木氏は，この『臥輪禅師看心法』からの引用が，延寿の『宗鏡録』巻98にあることを指摘されており，その思想的影響力もかなりあったものと考えられる。

ところでこの臥輪禅師には，別に『臥輪禅師偈』と題するものがあり，敦煌文献に３種の異本の存在が知られ，『景徳伝灯録』巻５にも引用されている。特に『伝灯録』では，一僧がこの臥輪禅師の偈を挙したのに対して，六祖慧能が，この偈は未だ心地を明らめず，もしこれに依れば，繫縛の因を加えるとし，自ら偈を示すとして，両者の偈が対比されている。これが『壇経』にみる神秀と慧能の偈の応酬に酷似しているところから，嘗て鈴木氏は，臥輪禅師を神秀系，すなわち北宗禅の人ではないか，とされていた。ところが圭峰宗密の『禅源諸詮集都序』巻下には，達摩系以外の散聖として，求那，僧稠と共に臥輪の名を挙げており，必ずしも達摩系とすることはできないようである。この臥輪について，柳田氏は嘗てその論文「思想という語をめぐって」〔『印度学仏教学研究』8—1　pp. 206—211〕 1660.　において，

明本『続高僧伝』巻25に伝のある曇倫，或いは『弘賛法華伝』巻7の高守節伝及び『宋高僧伝』巻27の唐五台山海雲伝にみえる臥輪等を考えられたが，氏の近著『初期禅宗史書の研究』では，曇倫は恐らく別人であり，臥輪との異同も決し得ず，従って臥輪の史実は不明とされている。しかし臥輪は少くとも達摩系の禅者ではなく，元来浄土系の禅者であったらしい，というのが氏の最近の推論である。

3.　**観心論**〔破相論，契経論，破二乗見，菩薩総持法〕

①S2595　②S5532　③P2460　④P2657　⑤P3777　⑥P4646

⑦竜谷大学所蔵122『観門大乗法論』本

〔敦煌出土以外のもの〕

⑧朝鮮『禅門撮要』本　⑨朝鮮安心寺本　⑩金沢文庫建長4年再写本

⑪金沢文庫建仁元年写本　⑫『少室六門集』本

〔**移録**〕⑫『卍版続蔵経』1輯2編15套5冊　411左—414左　1911.

⑫『大正新脩大蔵経』巻48　諸宗部5「少室六門」pp. 366c—369c　1928.——㊦[1]

①矢吹慶輝『鳴沙余韻』図版85（III）1930.

①『大正新脩大蔵経』巻85　古逸部　pp. 1270c—1273b 1932.—㊦[2]

⑨㊦[2]金九経『薑園叢書』奉天　1934.

⑧⑩⑫〔⑦㊦[2]〕鈴木大拙「達摩観心論（破相論）四本対校（下）」〔大谷学報』16—2〕　1935.

⑦⑧⑩⑫㊦[2]鈴木貞太郎（大拙）『少室逸書及解説』付録『達摩の禅法とその思想及其他』pp. 166—232　1936.

⑧花園大学祖録研究会覆印『禅門撮要』巻上　1954.

〔**論文**〕

忽滑谷快天　少室六門集の内容，誤られたる達磨の思想　〔『禅学思想史』巻上　p. 318〕　1923.

神尾弐春　観心論私考〔『宗教研究』新9—5〕　1932.　——尚これは後に，矢吹慶輝　神尾弐春氏の観心論私考〔『鳴沙余韻解説』第2部　pp. 545—556〕　1933.　として収録。

矢吹慶輝　神尾氏の観心論私考後記〔『宗教研究』新 9—5〕　1932.　——尚これは後に，矢吹慶輝　神尾弐春氏の観心論私考後記〔『鳴沙余韻解説』第2部　pp. 557—560〕　1933.　として収録。

矢吹慶輝　敦煌出土支那古禅史並に古禅籍関係文献に就いて〔『鳴沙余韻解説』第2部　pp. 543—545〕　1933.

禿氏祐祥　少室六門集につきて〔『竜谷学報』309〕　1934.

鈴木大拙　達摩観心論（破相論）四本対校（上）〔『大谷学報』15—4〕　1934.　——尚これは後に，鈴木貞太郎（大拙）観心論（破相論）五本対校〔『少室逸書及解説』付録『達摩の禅法とその思想及其他』pp. 166—180〕　1936.　として改訂収録。

宇井伯寿　北宗残簡　3観心論〔『禅宗史研究』pp. 423—424〕　1939.

関口真大　「達摩大師観心論」と北宗禅〔『達摩大師の研究』pp. 213—245〕　1957.

中田万善　敦煌出土文献の再検討——特に観心論S5532号について——〔『宗教研究』41—3　pp. 138—139〕　1968.

〔**略記**〕　『観心論』は北宗の祖大通神秀の著作であり，一巻の冒頭に，「唯観心の一法こそ，総て諸行を摂し，最も省要たり」という如く，観心を強調した北宗禅の根本資料として重要なものとされている。既に古く『破相論』の存在が知られつつも，これが『観心論』の異本であることが知られるようになったのは，1932年に神尾氏の論考が発表されて以来のことである。ただ『破相論』が，達摩のものでないことは，更に古く忽滑谷快天氏が『禅学思想史』巻上において指摘されていたことであり，その『破相論』が，『観心論』と同一内容のものであるとすれば，『観心論』も達摩のものでないことになるのであるが，

神尾氏は，更にそれを一歩進めて，これが神秀の撰述であることを論証し，この資料の位置づけをされたのである。

ところで，『破相論』は別として，『観心論』は，いかなるプロセスを経てその存在が知られるようになったのであろうか。『観心論』またの名『煎乳論』なる述作が，天台智者大師智顗にあることは，既に古くから知られていたが，この『観心論』とは全く別の『観心論』，すなわち①が敦煌出土文献の中に存在することを発見されたのは，矢吹慶輝氏である。矢吹氏は，この首尾2葉を『鳴沙余韻』で紹介され，それにもとずいて，当時朝鮮におられた神尾氏が，この『観心論』の異本と目さるべき数種を挙げ，その概略を紹介すると共に，その著者及び著作年代等についての論考を公にされた。これが「観心論私考」であって，それによれば，『観心論』の異本としては，明の隆慶4年（1570）朝鮮安心寺で開板されたという⑨の『達摩大師観心論』，同じく隆熙元年（1907）朝鮮の虎踞山雲門寺で刊行された『禅門撮要』巻上に収録された⑧の『観心論，初祖達摩大師説』，更に江戸時代我が国で編集された『少室六門集』の第2門とされる⑪の『破相論』の3種があり，それらの対照によって，『破相論』が『観心論』の異本であることが明らかにされたのである。またその著者についても，朝鮮本2種が達摩大師の説述となしているのに対し，貞元4年（788）より元和5年（810）にかけて完成をみた慧琳の『一切経音義』第100巻42張に，『観心論』の7語14字の音義が釈されており，そこに「観心論，大通神秀作」と記されているところから，この『観心論』の著者を北宗禅の始祖大通神秀と決せられ，また，矢吹氏も，「神尾氏の観心論私考後記」において，この神尾氏による著者の決定を高く評価されたのである。

一方，奉天の金九経氏は，1934年神尾氏の発見紹介になる朝鮮安心寺本，すなわち⑨と，『大正新脩大蔵経』巻85所収の敦煌本①，すな

わち㊦[2]とを対校し，これを，『大乗開心顕性頓悟真宗論』と共に『董園叢書』に収録された。

先に述べた神尾，矢吹両氏による『観心論』の論考，特にその作者を神秀とすることに対して，鈴木氏はこれを達摩作とする立場から賛成せず，神秀作と決定する前に，もう少し客観的，歴史的，又内容的に詮索を続けなくてはいけないという見地に立って，一層厳密な異本の対校を目指したのである。すなわち『大正新脩大蔵経』巻85所収の敦煌本①を最古のものとし，それに従来のものに加えて尚36問を有するという禿氏祐祥氏紹介の竜谷本⑦を対校したものを敦煌出土本と称し（移録ではこれを〔⑦㊦[2]〕で示した），それに同じく禿氏氏の紹介になる金沢文庫所蔵の⑩と⑪の２種（この２種は，最近金沢文庫の納富常天氏の御尽力により，他の禅宗関係文献と共に写真撮影して，本学図書館に収蔵された）の内，唐の会昌５年（845）に書写したものを，日本建長４年（1252）に再写したという『達摩和尚観心破相論』の首題を有する金沢文庫本⑩，朝鮮刊本⑧，日本流布の『少室六門集』本⑫の都合４本の対校を1935年に『大谷学報』16―2 に発表され，更に翌1936年には，敦煌出土本の内，⑦の竜谷本を別立して，『少室逸書解説』の付録，『達摩の禅法と思想及其他』に，⑦⑧⑩⑫㊦[2]の５本対校を掲載された。

この鈴木氏の詳細な異本の対校による本文紹介が進められたために，1939年に出版された宇井伯寿氏の『禅宗史研究』では，第８に「北宗残簡」として北宗禅資料10篇の校訂を掲載されるに際して，第４篇の『観心論』のみは，神秀撰とするのみで，本文は省略されたのである。

その後約20年間は，この書に関説するものは特に見られなかったが，1957年に関口真大氏が，『達摩大師の研究』を公にされた際，その第２章第４に，「達摩大師観心論（燉煌出土）と北宗禅」と題して詳細な論究をされ，『観心論』の内容，及び『伝教大師将来越州録』中の「看

心論一巻」や，『智証大師将来録』中の「六祖和尚観心偈一巻」等の将来目録の記載から，神尾氏の神秀撰述説に従うべきことを論証された。こうして今日では，『観心論』の神秀撰述説が確定的となるに至ったのである。

また最近になって，敦煌出土のスタイン本中に，一異本②の存在することが，中田万善氏によって発見紹介されたが，更にペリオ本中にも4種の異本の存在が知られるに至った。すなわち③④⑤⑥がそれで，その内現在見ることのできるのは，島崎昌氏撮影将来の④，井ノ口泰淳氏撮影将来の⑤，王重民氏の撮影，そして後に井ノ口氏の撮影将来になる⑥の3種類である。④は写真6葉で，1巻の首部約4分の1と，尾部僅かを欠いていて題名はみられないが，内容からして『観心論』の一異本であり，⑤は写真26葉中，第6葉から第19葉までが『菩薩総持法一巻亦名破相論亦名契経論又名破二乗見』に相当し，首尾完全である。そしてこの⑤によって，『観心論』は，『破相論』だけでなく，更に『菩薩総持法』『契経論』『破二乗見』等の呼称によっても呼ばれていたことが，明らかになったのである。また⑥は『維摩経』『文殊師利般若経』『頓悟大乗正理決』『観心論』『禅門経』を連写した183葉からなる梵爽式蝶装本中の一篇で，『観心論』は159葉から175葉に相当し，⑤同様首尾完全である。

従って，今日その存在が知られながら見ることのできないのは，③のみで，これは『敦煌遺書総目索引』によれば，『残道経』の背に，梁武帝撰『第一祖達摩禅師』の碑文4行に先立って『観心論』があるということである。このように，『観心論』の異本の数は極めて多く，中国西辺の地敦煌の洞窟内に埋蔵される一方，早くから朝鮮や日本にも流布伝承されていた点で，注目すべきものである。

4.　蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論　〔最上乗論，一乗顕自心論〕

①S2669　②S3558　③S4064　④P3434　⑤P3559　⑥P3777　⑦宇04
⑧竜谷大学所蔵122『観門大乗法論』本　⑨レニングラード東洋学研究所所蔵オルデンブルグコレクション1277
〔敦煌出土以外のもの〕
⑩朝鮮『禅門撮要』本　⑪朝鮮安心寺本
〔**移録**〕⑪『卍版続蔵経』1輯2編15套5冊　415右—417右　1911.——(卍)
(卍)『大正新脩大蔵経』巻48　諸宗部5　pp. 377a—379b　1928.
⑦鈴木貞太郎（大拙）『燉煌出土少室逸書』　影印 pp. 23—34 1935.
⑦⑩鈴木貞太郎（大拙）『少室逸書及解説』pp. 41—52　1336.
⑦⑧⑩鈴木貞太郎（大拙）『少室逸書及解説』付録『達摩の禅法とその思想及其他』pp. 143—165　1936.——(少)
①②③(少)鈴木大拙『禅思想史研究』第2　pp. 316—323　1951.
〔**論文**〕
忽滑谷快天　最上乗論；最上乗論は弘忍の真説に非ざる諸証並に金剛経〔『禅学思想史』巻上 pp. 371—374〕 1923.
禿氏祐祥　少室六門集に就て〔『竜谷学報』309〕 1934.
鈴木大拙　竜谷大学附属図書館蔵敦煌本「菩提達摩観門法大乗法論」殊に其中の「宗修心要論」に就きて〔『大谷学報』16—1〕 1935.——尚これは後に，鈴木貞太郎（大拙）竜谷大学附属図書館蔵敦煌本「菩提達摩観門法大乗法論」殊に其中の「宗修心要論」に就きて〔『少室逸書及解説』付録『達摩の禅法とその思想及其他』第2篇 pp. 105—120〕 1936.　として収録，更に鈴木大拙「修心要論につきて」〔『禅思想史研究』第2　pp. 298—316〕 1951.　として改訂

収録。

柳田聖山　伝法宝紀とその作者――ペリオ3559号文書をめぐる北宗禅研究資料の札記　その1〔『禅学研究』53〕1963.

関口真大　弘忍の守本真心〔『禅宗思想史』pp. 80―85〕1964.

中田万善　燉煌文献の再検討――特に弘忍の修心要論について――〔『印度学仏教学研究』17―2〕1969.

〔**略記**〕『修心要論』は，中国禅宗の五祖蘄州黄梅雙峰山の弘忍の述作といわれ，その内容は，「守心（守真心，守本真心ともいう）こそ涅槃の根本，入道の要門，十二部経の宗，三世諸仏の祖なり」というごとく，四祖道信の守一不移の禅風を継承発展させて，守心の禅風を発揚したもので，五祖弘忍によって確立された東山法門の思想禅風を示す貴重な資料とされている。

本書は，既に古く「最上乗論，第五祖弘忍禅師述」として，『卍版続蔵経』の禅宗著述部中に収録されているが，それは後記によれば，明の隆慶4年（1570）朝鮮安心寺で開板されたものを，日本正徳6年（1716）尼妙厳が彫刻し，宣流させたものである。しかし，忽滑谷快天氏は，その著『禅学思想史』巻上において，本書が初学をして『観無量寿経』に依らしめるのは，祖門の正伝にあらず等，5種の反証をあげて弘忍の真説ではないと主張された。

従って，その後は『最上乗論』もほとんど重視されることもなかったのであるが，偶々蘄州忍和上，すなわち蘄州雙峰山の弘忍禅師の述作とされる『修心要論』が，敦煌から発見され，鈴木大拙氏による対校の結果，両者が多少の差こそあれ本来同一のものであることが立証されるに至り，爾来これが禅宗第五祖弘忍禅師の述作として，極めて重要な資料とされるに至ったのである。

さて，敦煌本は今日9種の存在が知られているが，最初に紹介されたのは，⑧の竜谷本である。竜谷本は，禿氏祐祥氏が，1934年「少室

六門集に就て」と題する論文でその存在を報告され，それにもとずいて翌1935年，鈴木氏が『修心要論』を中心とした竜谷本についての論考を発表されて以来注目されるようになったもので，表紙には「西天竺国沙門菩提達摩禅師観門法大乗法論」なる表題を持ち，68紙からなる唐末の長策子本で，この中には『四弘誓願』『南天竺国菩提達摩禅師観門法』（表題はこれにもとずく），『法性論』（擬），『証心論』『修心要論』『三宝問答』（擬），『観心論』という如く，初期禅宗の重要資料が連写されているものであり，今問題の『修心要論』は，具には『蘄州忍大師是祖超凡趣聖悟解脱宗修心要論』なる題名がつけられている。

また鈴木氏は，この竜谷本についての論考を公にする前年の1934年夏に，北京の北平国立図書館で，⑦の北京本を見ておられ，1935年に影印本『燉煌出土少室逸書』で，これを紹介される一方，その解説である『少室逸書解説』で，⑩の朝鮮刊本との対校を，更にその附録『達摩の禅法とその思想及其他』で，⑦の北京本，⑧の竜谷本，⑩の朝鮮刊本の3本対校をそれぞれ公にされた。この内北京本の題名は，『一乗頭自心論』，朝鮮刊本の題名は『最上乗論』となっている。

更に翌年の1936年，鈴木氏は，ロンドン大英博物館でスタイン本を調査された際，その中に，①のS2669，②のS3558，③のS4064の3種に『修心要論』のあることを発見され，先に『少室逸書解説』付録『達摩の禅法とその思想及其他』でなした⑦⑧⑩の3本対校と，新発見のスタイン本①②③の3本対校との都合6本対校を，1951年出版の『禅思想史研究』第2に発表された。この『禅思想史研究』第2は，近年『鈴木大拙全集』巻2として改訂出版されている。

スタイン本3種の表題は，①が『蘄州忍和尚導凡趣聖悟解脱宗修心要論』で，②と③は，「忍和尚」を「忍和上」とする違いのみで一致し，②は後半を欠いているが，②③共に『了性句並序，崇済寺禅師満和

尚撰』『澄心論』『除睡呪』『修心要論』の連写本で，後述する⑥のペリオ本をも併せて，②③⑥の3種は同一系統の写本であることが知られる。一方①は，最初に首部を欠く『軍勝気象占』の第2第3があり，以下は『四弘誓願』『〔南〕天竺国菩提達摩禅師観門』『法性論』(擬)，『澄心論』『除睡呪』『修心要論』『三宝問答』(擬）が連写され，最後の『三宝問答』は中途で断欠しているが，これは⑧の竜谷本と同一系統の写本であることは明らかである。

近年パリー国民図書館所蔵のペリオ本の調査がかなり進んできたが，ペリオ本関係では，1963年柳田聖山氏が，「伝法宝紀とその作者――ペリオ3559号文書をめぐる北宗禅研究資料の札記　その1」を『禅学研究』に発表された際，⑤のP3559に『蘄州忍和上導凡聖解脱宗修心要論』のあることを報告された。この⑤の『修心要論』を含むP3559は，写真35葉からなり，首部を欠いているが，『円明論一巻』『阿摩羅識論』(擬)，『導凡聖悟解脱宗修心要論，蘄州忍和上』『秀和上伝』『導凡趣聖心決』『夜坐号一首』『伝法宝紀並序，京兆杜朏字方明撰』『終南山帰寺大通道和上塔文』『先徳集於雙峰山塔各談玄理十二』『稠禅師意』『稠禅師薬方療有漏』『大乗心行論 稠禅師』『寂和上偈』『姚和上金剛五礼』『大般若開』の16種の北宗禅関係の文献を連写した長巻子本で，柳田氏は，これら各文献の詳細な検討と紹介をしつつ，その中に含まれる『伝法宝紀』の作者についての新たな論究を試みられた。このP3559の写真は，柳田氏がパリー在住の柴田増実氏を通じて入手されたものの外，東大教授山本達郎氏撮影のものが島崎昌氏撮影将来の写真と合綴されて東洋文庫にあり，最近井ノ口泰淳氏も別に撮影将来されるという盛況ぶりである。

尚『修心要論』のペリオ本については，柳田氏が前記論文の中で，⑤のP3559の他に，呉江陸訳，法国伯希和編『巴黎図書館敦煌写本書目』に，『華文・導凡趣聖悟解脱宗修心要論一巻，蘄州忍和上著，背有

大順四年（893）書，甚潦草』とあるによるとして，④のP3434の存在を報告されている。ただ大順の年号は890—891の2年までで景福と改元されるから，大順4年は問題であるが，この④の写真は，王重民氏の撮影になるものが東洋文庫に将来されていて今日見ることができるし，先に触れた⑥のP3777は，『菩薩惣持法一巻』すなわち『観心論』を頭に，『了性句并序，崇済寺禅師満和尚撰』『澄心論』『除睡呪』『入定呪』『蘄州忍和上導凡趣聖悟解脱宗修心要論一巻』を連写したもので，スタイン本の②③と同一系統の写本とみられるが，これも最近井ノ口氏によって撮影将来されている。従ってペリオ本は，現在3種の存在が知られ，そのすべての写真が我が国にもたらされていることになる。

またペリオ本と共に，北京本も，最近になってその大部分のマイクロフィルムが，ケンブリッジ大学を通じて東洋文庫に収蔵されるようになり，その焼付も現在着々と進行中である。従って，既に今から約35年も前に，鈴木氏の非常な努力によって『少室逸書』に影印本として紹介された北京本宇04の『一乗頭自心論』すなわち⑦も，新たなフィルムとして将来されるに至ったのである。

一方，ソ聯のレニングラード東洋学研究所に蔵されるオルデンブルグコレクションの中にも，『修心要論』の一異本が存在するようである。このオルデンブルグコレクションについては最近岩波書店発行の雑誌『文学』38巻12号（1970年12月発行）に，金沢大学教授川口久雄氏が，「ソヴェートにある敦煌資料——日本文学との関係——」と題して，かなり詳細に紹介されていることを本学講師岡部和雄氏に示唆され，極めて興味深く閲読することができたのであるが，その中にも触れられているように，レニングラードの敦煌写本は，断片を含めて総数12,000点あり，L.N.メンシコフ氏を中心とする敦煌グループによって刊行された『敦煌写本解説目録』の第1巻第2巻の既刊2冊で，

その内の3000点が紹介済である。今問題の『修心要論』は，その第1巻の1277番に『尊凡起聖悞脱修心成仏要論』と題して，「願〔同行〕者〔伝〕□〔欲行解〕」より，「羅者彼也，蜜者岸也，答，阿之言无，稠之言上，多之言正，猿之言……」までがあるということである。この内タイトルの尊は導，起は趣，悞は悟の誤記であろうし，成仏の2字は，この一本に特に附加されたものであろう。このオルデンブルグ本は，現在のところ撮影困難ということであるが，将来，このコレクションの撮影可能になることが，特に期待される。

以上のように，『修心要論』の現存写本は，11種とその数が多く，しかも世界各国にわたってもたらされていることに特色があり，今日ではレニングラードのもの以外は，ことごとく我が国で，その内容を知ることができるのである。

5.　師資七祖方便五門

①旧禿氏祐祥氏所蔵本

〔**移録**〕①鈴木大拙「敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて，第2原本7」〔『禅思想史研究」第2　pp. 480—482〕 1951.

〔**論文**〕 敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて，第1解説」〔『禅思想史研究』第2　p. 466，p. 468〕 1951.

〔**略記**〕 ①は，鈴木大拙氏が，竜谷大学教授禿氏祐祥氏から入手された貝葉形の敦煌写本の写真6葉の内，『臥輪禅師看心法』に先立つ最初の部分に存するもので，首尾完全であるという。現在のところ，この文献の異本の存在はまったく知られず，またこれに関説する論文も，鈴木氏のものを除いては見当らない。鈴木氏は，これを校訂して，その著『禅思想史研究』第2の第7篇「敦煌出土本中，禅に関する文献七種につきて」の第2原本の7に掲げられ，それに先立つ第1の解説で，ごく簡単にこの文献を「北宗系の思想を摘要したもの」と規定された

のである。

さてこの表題であるが，鈴木氏校訂本では，『師資七祖方便五門，摘句抽心録之如左』とされている。すなわち『師資七祖方便五門』とされるものから，重要な句を選び出して記録したものということであろうが，事実本文を見ると，前後一貫したものというよりは，それぞれ特色ある言句をとり出して，それを並べ記したもの，という感じが強い。

たとえば，「凡聖本性無殊」というのは，達摩の『二入四行論』の理入に説く「含生凡聖同一真性」を想起させるし，「定慧双開」は，『証心論』の「定慧雙修」とか，『法性論』（擬）の「定慧等用」等と揆を一にする主張であり，「閑居浄坐，守本帰真」は，五祖弘忍の「蕭然浄坐，守本真心」と極めて類似している。更には「求浄仏国，離貢高心，清浄為西方，去心乱名中国。経云，無量劫一念，一念無量劫，無量方一方，一方無量方。仏為利根説，不為浅識者」という文章は，『楞伽師資記』道信条の「曰，用向西方不。信曰，若知心本来不生不滅，究竟清浄，即是浄仏国土。更不須向西方。華厳経云，無量劫一念，一念無量劫。須知一方無量方，無量方一方。仏為鈍根衆生，令向西方，不為利根人説也」とまったく同一内容のものである。

されば，ここにいう「師資七祖」とは，その背景に禅宗の七祖説があり，しかも「方便五門」とは，北宗禅の資料である『大乗五方便』とも関連して，北宗禅を意味していると考えられるからして，この場合の師資七祖は，北宗禅で唱え出された七祖説であることは間違いない。

北宗禅の七祖説としては，『法如禅師行状碑』や『伝法宝紀』等，初期にみられる初祖達摩から，慧可，僧璨，道信，弘忍，次いで法如を経て六祖神秀に至る系譜，或いは，『楞伽師資記』にみられるグナバダラを初祖とし，達摩を二祖として，以下慧可，僧璨，道信，弘忍

と続いて七祖神秀に至る系譜等があるが，この場合はそれよりも，慧能の弟子荷沢神会が，『南宗定是非論』の中で，「今普寂禅師在嵩山竪碑銘，立七祖堂，修法宝紀，排七代数，不見著能禅師」或いは「今普寂禅師自称為第七代，妄竪秀和上為第六代，所以不許」といって激しく批難した，初祖達摩から，慧可，僧璨，道信，弘忍，神秀を経て七祖普寂に至る師資七祖の系譜を指したものではなかろうか。普寂が禅宗第七祖として意識されていたことは，敦煌出土のS2512Vに，普寂の入滅に当っての斎讃文とみられる『第七祖大照和尚寂滅日斎讃文』（擬）が存在し，その中で普寂，すなわち大照和尚が，第七祖とされていた事実によって窺い知られるのである。と同時に，普寂を第七祖とする北宗系のグループで，『大乗五方便』もまとめられたのではないかということが推察される。

こうした意味でこの資料は，「師資七祖」を主張したグループと，「方便五門」すなわち『大乗五方便』を編纂したグループとの関係を示す貴重な文献ではないかと考えられる。

〔付記〕 以上　Ⅰ伝燈・嗣承論〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』27号〕1966. に続いて，Ⅱ禅法・修道論の一部を紹介した。紙幅の都合で，禅法・修道論に属する約30種の内，僅かに5種を示すに止まったが，今後，更に継続して公にしていきたいと考えている。記載漏れや誤記等もあると思うが，今後より完全な目録にしていくためにも，各位の御指教を切望する次第である。